



農事普及だより

(4月号 令和3年4月1日～4月30日)

〔発行〕 鶴田町／鶴田町農業支援センター／鶴田町産業課
つがるにしきた農業協同組合鶴翔統括支店
西北地域県民局地域農林水産部農業普及振興室
〔編集〕 西北地域県民局地域農林水産部農業普及振興室

気象

(令和3年3月18日 仙台管区気象台発表
東北地方1か月予報より)

向こう1か月の気温は高く、期間の前半はかなり高くなる見込みです。
降水量は、平年並みか多いでしょう。

水稻

健苗育成と適期作業で初期
生育を確保しよう！

1. 育苗

(1) 浸種
浸種は10日～14日間程度(日平均積算水温で100℃が目安)、浸種時の水温はできるだけ10℃以下にならないようにする。低温で浸種した場合、日平均積算水温で100℃を確保しても、出芽不良や出芽遅れの原因となる場合があるので注意する。

(2) 催芽
育苗器などを利用し、吸水させた籾を30～32℃で16～20時間加温し、ハト胸程度(芽の長さ0.5～1ミリ)にする。温度が40℃以上になると発芽率が低下するので、特に風呂を使う場合は注意する。

(3) は種
中苗のは種量は、1箱当たり乾籾で100g(催芽籾で125g)とし、厚播きにならないよう注意する。

(4) 育苗土の準備
ふるいにかけて育苗土を床土と覆土を合わせ、1箱当たり5ℓ程度準備する。施肥量は、中苗散播・基肥方式で窒素・リン酸・加里を成分量で各2.5g/箱とする。

(5) 苗立枯病の予防
床土はpHが4.5～5.5の土を使用する(pHが高い場合はpH調整剤で調整する)。育苗中は適温を保ち、過湿や過乾燥を避ける。

■ 薬剤による主な防除方法

適用病害虫	剤型	粉剤(土壌混和剤)		液剤(は種時かん注)	
ピシウム菌		タチガレエースM粉剤	8g/箱	ナエファイン粉剤	
フザリウム菌				タチガレエースM液剤	1000倍液を1ℓ/箱
リゾープス菌(くものすかび)		ダコニール粉剤	15～20g/箱	6～8g/箱	2000倍液を1ℓ/箱

(6) 置床の準備
㊦ ハウス育苗方式
置床は育苗箱の底と密着するよう均平にする。碎土が不十分な場合や足跡等のくぼみがあると生育ムラができるので十分注意する。

㊧ トンネル折衷育苗方式
置床の硬さは耳たぶ程度に調整し、必ず排水溝を設ける。やわらかく、育苗箱が床土に沈み込むようだと、過湿による出芽障害となるので注意する。

(7) 温度管理
生育に合わせた温度管理を行うため、必ず温度計を苗の高さに設置する。

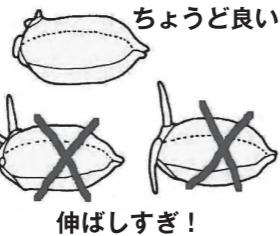
㊦ 出芽期まで
日中35℃以下。ハウスでは、シルバーポリトウなどの被覆で、水分保持と保温をする。天気の良い日には、出芽前でもハウスの換気を行い、35℃以上にならないように注意する(シルバーポリトウは風でめくれないう、箱下に折り込むか、重しを置く)。

㊧ 出芽揃期～1.5葉
日中30℃以下。ハウスの大部分の箱で7～8割程度の出芽が見えたら、早めに被覆資材を除く。持ち上がった覆土はかん水等で落ち着かせ、種籾が露出していたら土をかける。

㊦ 1.5～3葉 日中25℃以下。
㊧ 3葉以降
日中20℃以下。天気の良い日は外気に慣らし、苗を丈夫に育てる。

※ 霜・低温が予想される場合
被覆資材での二重被覆を行うか、ハウス内に暖房器具を入れて保温する。

(8) 水管理
かん水は、床土が乾いたら午前中(地温が上がる前)にたっぷり行う。
機械的に毎日かん水すると、箱内の根張りを弱くし、軟弱徒長苗になりやすいので、かん水の回数は控え気味に管理する。
折衷苗代では、過湿にならないよう排水溝を必ず設置する。



春の農作業安全運動展開中 4月1日～5月31日

トラクター等の大型機械の使用が始まります。
まずはワンチェック、ワンアクションで農作業安全！

2. 本田作業

(1) 施肥(基肥)
米の品質と食味向上のため、窒素の総量は、「つがるロマン」の場合6～8kg/10a、「まっしぐら」の場合7～10kg/10aとする。基肥量は1回追肥体系の場合は総量の7～8割、2回追肥体系の場合は総量の6割とする(側条施肥の場合は、基肥を2割減ずる)。
「青天の霹靂」の基肥窒素成分は6kg/10a以内とする。全層穂肥1回追肥体系を原則とする。多肥栽培では、倒伏したり、いもち病にかかりやすくなるほか、食味・品質の低下につながるので、昨年のいもち病の発生程度や倒伏状況に応じて基肥量を減らす。
大豆の復元田では、生育が過剰となり、倒伏のおそれがあるので基肥8割減～無肥料とし、追肥は生育量や葉色を見て判断する。小麦の復元田では、4～6割減とし、生育に応じて追肥を行う。倒伏軽減と初期生育確保、登熟向上のため、ケイカルとようりんを施用すると効果的である。

(2) 耕起・代かき
耕起作業は耕す深さは15cm程度を目標にしていぬいに行う。
稲わらを鋤き込んだ水田では、浮きわらを抑えるため水深を浅めにして代かき作業をする。

小麦

排水対策や適期追肥に努めよう！

1. 湿害防止

転換畑等では、融雪水、降雨水が長時間停滞しないよう、明きょや排水溝の補修、補強を行い、ほ場外に速やかに排水できるようにしておく。

2. 追肥

消雪後、幼穂形成期までのなるべく早い時期に追肥を行う。
追肥量は窒素成分で2kg/10aを基準とし、融雪遅れによる生育遅延、ほ場の地力等を考慮して増減する。

3. 病害虫防除

越冬前の生育量が多く繁茂しているほ場では、うどんこ病の被害が大きくなるので、適期防除に努める。

農薬適正使用と隣接農地への飛散防止に十分気をつけましょう！

- 使い残した農薬などは、河川等へ絶対捨てない。
- 農薬を使用する場合には、必ず最新の「農薬登録情報」を確認しましょう。
- 農薬は鍵のかかる専用の場所に保管し、管理を徹底しましょう。

りんご

黒星病対策を徹底しよう！！

りんごの発芽は平年より早まる見込みである。黒星病の菌密度を下げるためにできるだけ越冬落葉の処理を行うとともに、SSの試運転などを早めに行い、防除体制を整える。

1. 黒星病対策

- (1) 落葉の除去
落葉をレーキ等で集め、ほ場の外へ搬出し処分する。
- (2) 落葉のすき込み
樹の根元の落葉をレーキ等で機械走行路に集め、小型耕うん機や低床トラクターなどを使って、深さ5cmで1回耕うんする。
- (3) 薬剤による重点防除時期は平年だと「展葉1週間後頃」～「落花30日後頃」(6月下旬)である。適期に適量を散布する。

2. 霜害防止対策

晴天無風で、前日午後7時の気温が6℃以下のときに降霜の危険性が高い。霜害が予想される場合には、気象台から霜注意報が発令されるので、これらの情報に注意する。

■ 燃燒法による防止

種類	利用方法
A重油オイル缶	4リットル缶を利用する場合、10a当たり30缶以上を配置する。
霜カット	おがくず：灯油＝2：1(容量)の割合で混ぜたものを2kgずつ袋に詰め、10a当たり40～60個を配置する。

- 注) 1 灯油の保管量が200～1000ℓ：少量危険物貯蔵届出書の提出が必要
2 // 1000ℓ以上：危険物取扱者の資格が必要
3 所轄の消防署に「火災と紛らわしい煙又は火災を発生する恐れがある行為の届出書」などを提出する。

3. 粗皮削り

粗皮削りは、胴腐らんの早期発見やハダニ類、クワコナカイガラムシの防除のため、必ず実施する。

4. 野ネズミ被害樹の治療

樹幹を食害された場合、樹皮が幹周の4分の1以上残っているものは早めにバッチレートを塗るか、テープを巻いてカルス形成を促す。

5. 基肥

基肥は4月20日頃までに施用する。石灰質肥料は基肥を施用後、降雨があった場合は2～3日後に、降雨がない場合には2週間後を目安に施用する。
肥料の施用量は下表のとおりであるが、追肥を計画している園地では、窒素分の6割を基肥とする。果実の着色が良くない園地や樹勢が強すぎる園地では、窒素分を半分に減らす。

■ りんごの標準施肥量(年間総量、園地全面施用)

区分	施肥量(kg/10a)			備考	
	普通台樹	わい性台樹	窒素 りん酸 力リ		
成木	6年生～	15	5	5	部分(樹冠下)
6～10年生	4～5年生	10	3	3	施肥の場合は、
1～5年生	1～3年生	5	2	2	施肥量を減ずる

6. 病害虫防除

4月は主要病害虫の重要防除時期であることから、散布適期を逃さないよう注意する。また、散布間隔は10日以内を厳守し、散布量は節約しない。
散布予定日に降雨が予想される場合は、事前散布に徹する。

■ 薬剤散布(散布時期は生育状況により変わるので、新しい情報を参考にする)

散布時期	基準薬剤	散布量 ℓ/10a	備考
ふじの展葉1週間後頃(4月下旬頃)	マシン油乳剤 ダースバンDF ペフラン液剤25	200倍 3,000倍 1,000倍	300
ふじの開花直前(5月上旬頃)	SDHI剤		320
ふじの落花直後(5月中旬頃)	ミギワ20フロアブル + テランフロアブル 又はチウラム剤 又はマンゼブ剤	4,000倍 1,500倍 500倍 600倍	350

※SDHI剤は、以下の5剤から選択する。
オルフィンフロアブル 4,000倍 / ネクスターフロアブル 1,500倍
フルーツセイバー 2,000倍 / カナメフロアブル 4,000倍
パレード15フロアブル 2,000倍
※チウラム剤：チオノックフロアブル、トレノックスフロアブル
※マンゼブ剤：ジマンダイセン水和剤、ベンコゼブ水和剤

～ 黒星病徹底防除推進期間(4～6月) ～

7. マメコバチの放飼と管理

放飼時期の調節のため、筒内の蜂が動き始め、カチカチと音がするようになった頃に、0～5℃の冷蔵庫に保管する。
展葉1週間後頃の薬剤散布2～3日後に冷蔵庫から出し、放飼する。また、土取り場や防鳥網の設置などの管理も怠らないようにする。

8. 人手授粉による結実確保

マメコバチ導入園において、マメコバチの数が不足きみであったり、不順天候によって十分に活動しない場合には、人手による授粉も行い、結実確保に努める。

9. 機械の点検整備と事故防止

4月は、農作業が本格化する時期である。スピードスプレーヤーや草刈り機械、高所作業台車等早めに点検し、いつでも使えるよう準備する。
また、機械作業による重大な事故も発生していることから、走行路や枝の出具合などを確認し、転落・横転・衝突しないよう園内を整備する。

特産果樹

おうとう

摘芽で大玉生産、霜害防止対策を徹底しよう！！

1. 霜害防止対策

晩霜の恐れがあるため、りんごと同様、霜害対策には万全を期す。(詳細はりんごの項を参照)

2. 摘芽

紅秀峰は着果量が多くなりやすいので、催芽前(4月上旬頃)までに摘芽を行う。花束状短果枝の大きい花芽を3芽程度残して、他の花芽を指でかき取る。葉芽(○で囲んだ芽)は残し、人工授粉は必ず行う。
なお、晩霜の常襲地帯や花芽の少ない樹、樹勢の強い樹では行わない。



摘芽前（花芽数：6個）



摘芽後（同・3個、大きい花芽を残す）

3. 結実確保

おうとうの開花期は、低温や強風に遭遇することが多い時期であることから、マメコバチを導入している園地であっても、毛ばたぎによる人工授粉を徹底する。5分咲き頃と満開期に、計2回実施する。

4. 病害虫防除

「開花直前」以降は、散布予定日に降雨が予想される場合は、事前散布に徹する。

■薬剂散布（散布時期は生育状況により変わるので、新しい情報を参考にする）

散布時期	基準薬剤	散布量 % / 10 a
発芽前	ハーベストオイル 又はトモノールS	50倍
開花直前 (4月下旬)	オーソサイド水和剤80	800倍
満開5日後頃 (5月上旬)	パスワード顆粒水和剤 又はオンリーワンフロアブル 又はラリー水和剤 又はオーシャイン水和剤	1,500倍 2,000倍 2,000倍 3,000倍

※コスカシバの発生が多い園地では、開花前にフェニックスフロアブル500倍を枝幹部に十分かかるように手散布する。

※農薬はおうとう園の周辺や他の作物、近隣の住宅等に飛散させない。



ぶどう

休眠期防除は黒とう病や晩腐病防除の要！霜害防止対策を徹底しよう！！

1. 園地の点検

雪で傾いた支柱や破損した腕木を取り替え、架線の緩んでいるものは、補強して主枝を結束し直す。また、病害の発生源となる架線上の巻きひげや成り跡、粗皮を除去し処分する。

2. 野ネズミ被害の事後対策

野ネズミの食害により回復が見込めない場合は、苗木更新する。

3. 施肥

基肥を秋に施用している園地では、4月上旬に全量の10%を追肥として施用する。また、春に基肥を施用する園地では、全量の60～80%を施用する。

■ぶどう成木の標準施肥量 (kg / 10 a)

区分	窒素	りん酸	カリ
全量	15	10	10
春が追肥の場合（秋に基肥）	1.5	1	1
春が基肥の場合	9～12	6～8	6～8

4. 病害虫防除



ぶどうの催芽

休眠期は、黒とう病や晩腐病防除の要なので、催芽前に必ず薬剂散布する。なお、今年は生育が早まることが予想される。ぶどうの生育をしっかり観察し、散布が遅れないよう注意する。

- ※1 催芽：りん片が開いて褐色の綿毛が見え始めた状態
- ※2 催芽日：樹全体の20%以上の芽が催芽した日
- ※3 平年の催芽日：4月16日
(平成13年～令和2年の平均値、調査地は鶴田町境)

※農薬はぶどう園の周辺や他の作物、近隣の住宅等に飛散させない。



■薬剂散布（スチューベン、シャインマスカット）

散布時期	基準薬剤	散布量 % / 10 a
休眠期 (4月上旬)	デランフロアブル 又はパスポート顆粒水和剤 又はベンレート水和剤 ※シャインマスカットはデランフロアブルを選択	200倍 250倍 200倍
	ガットキラー乳剤	100倍

5. 霜害防止対策

晩霜のおそれがあるため、りんごと同様、霜害対策には万全を期す。(詳細はりんごの項を参照)ハウスぶどうでは、ハウス内を暖房器具(石油ストーブ)を用いて加温する。

野菜

トマト

温度変化が激しい時期、きめ細かな温度管理に努めよう！

1. 鉢上げ後の管理

鉢上げ後、しばらくは鉢底に根を張らせるために、かん水は控えめに行う。本葉4枚前後になって下葉が1枚萎れたら、鉢底までの浸透を目安にかん水を行い、その後、本葉6枚までは下葉が1枚萎れたら軽くかん水する。本葉6～8枚頃は急に伸びるため、下葉が2～3葉萎れたら軽くかん水し、やや乾き気味にして徒長を防ぐ。本葉8枚になったら鉢の底までかん水し、その後、定植までは萎れない程度に軽くかん水して鉢の上部まで根を増やす。最高気温は、定植5日前までは20～25℃で管理する。最低気温は、鉢上げ後～本葉3.5枚までは16～18℃、本葉6枚までは14～16℃、本葉9枚までは12～14℃、定植までは12℃以下にしないよう管理する。徒長を防ぐため、本葉が4枚と7枚頃に葉が重ならないように鉢ずらしを行う。

2. 定植準備

堆肥や改良資材等は定植1か月前を、基肥は定植2週間前を目安に施用する。

■新作ほ場での標準施肥量 (kg / 10 a)

窒素	りん酸	カリ	備考
10～12	28～35	10～12	●施肥量は土壌分析に基づいて決める。 ●接ぎ木苗の場合は窒素成分量を10～20%減ずる。

定植の7～10日前にはマルチを張り、深さ10cmの地温を15℃以上に高めておく。

3. 定植

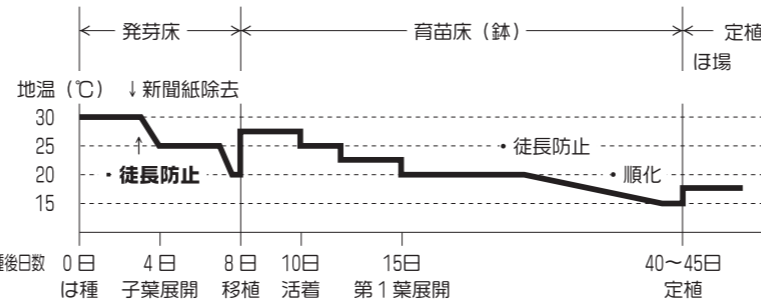
定植作業はなるべく温暖な日に行う。定植2～3時間前に鉢にかん水するが、肥料不足の場合は液肥で追肥を行う。植え付けは、花房を通路側に向け、鉢の回りを両手で上から押して土と根鉢を密着させ、根鉢上面と畝面が同じ高さになるように行う。植穴を掘ったときに出土は植穴の周囲に盛り土として置き、マルチの熱が逃げないようにする。夜間の冷え込みが予想される場合は、ハウスを早めに閉じ、保温に努める。また、可能な場合は、不織布等のべたがけで保温する。

メロン

1. 育苗管理

- 移植（鉢上げ）**
移植1週間前までに鉢に土を詰め、ビニールで被覆し地温を高めておく。苗立枯病防止のため深植えせず、温度が下がり始める午後3時頃までに移植を終える。
- 移植後の管理**
地温は下図を参考に管理し、トンネル内の気温は15℃～30℃を目標に管理する。鉢上げ直後から1～2日間はトンネルを密閉し、日差しが強い時は遮光し、最高気温は30℃以上にしない。3日目からはトンネルを開閉して換気を行い徒長を防ぐ。鉢の表面が乾いたら、地温を下げないように午前中に温水をかける。葉と葉が重なり合うようになったら、鉢ずらしを行い、苗の受光体勢をよくする。この時、外側と内側の苗を入れ換え、生育を揃える。定植の7日位前から夜温を徐々に下げ、苗を外気に慣らす。

■発芽床と育苗床（鉢）の床温（地温）管理



2. 本畑の準備

堆肥や改良資材等は定植2週間前に、基肥は定植10日前に施用する。畝の高さは、畑地では20cm、転作田では30cmの高畝とする。定植の1週間前にはマルチ、トンネルを張る。マルチは、地温上昇効果や抑草効果の高いグリーンマルチを使用し、深さ20cmの地温を18℃以上に高めておく。また、均一な土壌水分を確保するため、マルチ前に十分かん水するか、降雨後にマルチングする。

3. 定植

速やかな活着を促すため、定植作業はなるべく温暖な日に行う。夜間の冷え込みが予想される場合は、早めにトンネル被覆資材を閉じるとともに、保温キャップや不織布などの資材を併用し、保温に努める。

花き

キウ

ハウスの温度管理を徹底しよう！

1. 7月・8月出し栽培の管理

- 育苗**
育苗期間は15～20日を基本とし、定植期に合わせて計画的に挿し芽を行う。早期発蕾する品種もあるので、電照等により花芽分化を抑制する。
- 施肥**
全量で窒素成分1～2kg/aを基準とし、基肥として6～7割を施用する。追肥は、葉色や生育の状況に応じて適宜行う。
- 定植**
無加温ハウス栽培では4月が定植適期となる。早すぎると奇形花等が発生しやすく、遅すぎると草丈が短くなるので、立方法を考慮して定植時期を決定する。定植後は活着を促すため、むらなく十分にかん水し、10℃を目標に夜温を確保する。活着後は、昼温25℃、夜温5℃程度を目安とし、必要に応じて保温や換気を行う。

トルコギキョウ

1. 夏出し栽培の管理

- 秋播き無加温栽培**
日照時間の増加、気温の上昇に伴い茎が伸長してくるので、発蕾まで極端に乾燥させないように管理する。低節位から分枝が発生した場合は早めに除去して主茎の伸長を促す。
- 春播き栽培（4月定植）**
ほ場のpHが低い場合、pH6.5を目標に土壌改良する。基肥は基本的に3要素とも1kg/a程度であるが、ECが0.4以上の場合には下表を参考に減肥する。

■施肥前EC値による基肥窒素量減肥の目安（対基準量）


土壌の種類	0.3ms/cm以下	0.4～0.7	0.8～1.2	1.3～1.5	1.5以上
腐植質黒ボク土	基準量	2 / 3	1 / 2	1 / 3	無施用
沖積土・洪積土			1 / 3		
砂質土		1 / 2	1 / 4		

定植前に地温を12～20℃に高めておき、定植適期の本葉2.0～2.5対（展開葉4枚程度）の時に定植する。定植後のかん水は地温が急激に下がらないよう暖かい日の午前に行い、極端に乾燥しないようこまめに行う。

2. 春播き秋出し栽培のは種・育苗

育苗用土はpH6.5前後で肥料成分が含まれている清潔なものを使う。は種後は覆土はせずに、発芽まで昼温25℃前後、夜温15～18℃を目標に管理する。発芽までは乾燥させないことが重要で、水滴が細かい噴口での上部かん水が望ましいが、そのような設備と労力がない場合は底面吸水も有効である。その場合は、育苗箱の底から根が見え始めたら、上部からのかん水に切り替える。発芽揃い後は、昼間15～20℃、夜間15℃程度を目安に管理する。

町農業委員会では、毎年6月中旬から農地パトロールを実施し、遊休農地や、放任園等の発生防止に取り組んでいます。農地の貸借や売買については、町農業委員会へご相談ください。



【農業の相談はこちらへ】
農業についての各種相談を受け付けております。受付した内容は即時対応いたしますので、気軽にご相談ください。
鶴田町農業支援センター 午前9時から午後5時 ☎22-2111 (役場産業課)

～農事普及だよりは町ホームページにも掲載しております～
URL <http://www.town.tsuruta.lg.jp/kurashi/kurashi-nougyou/post-117.html>